

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：安志那

安志那氏の博士学位請求論文「『満州』移民の『国策文学』とイデオロギー——日本・朝鮮・中国をめぐる——」は、「満州」移民をめぐる国策文学のイデオロギーを、具体的な小説の分析に基づいて批判したものである。

第一章では、国策団体としての「農民文学懇話会」と「大陸開拓文芸懇話会」が設立される過程を歴史的に検証し、同時代の大日本帝国内の文学状況と戦争遂行政策とのかかわりの中で、「満州」移民についての国策文学をめぐるイデオロギーと現実との矛盾が指摘されていく。

またこの二つの懇話会が行った移民地の視察と、その結果を文章にする実践が、現実をありのままに伝達する「報告文学」という評価を、「満州」移民文学に付与したことが明らかにされている。

第二章では、「満州」をめぐるイデオロギーの諸相を思想史的方法で検討している。

まず関東軍の満蒙領有論の分析が行われ、ついで「満州国」を建国する論理としての「民族協和」と「王道主義」が批判的に検証され、「満州国」建国後の排除の論理との関連が指摘されていく。

次に統合の論理としての「八紘一宇」思想の担った役割が検証されたうえで、「満州」体験者の戦後の記憶と語りの分析を通じて、「満州国」を正当化する諸思想の間の矛盾が明らかにされてゆく。

第三章から六章までは、「満州国」をめぐる歴史学と社会学の研究成果を導入しながら、「満州」移民を題材とした国策小説が分析されている。

第三章では張赫宙の『開墾』（一九四三）が分析対象とされている。この小説では、一九三一年に発生した万宝山事件をモデルにしながら、日本人移民に先行した朝鮮人移民の果たした役割が描かれていることがまず明らかにされる。

そして日本領事警察による保護に感動する朝鮮人農民を描きながらも、彼らが「満州国」建国のスローガンに一切関心を示さない事実がこの小説に書き込まれていることに注目する。そして国策小説でありながら、朝鮮農民の側から「満州」を描くことで、そこに内在する矛盾を『開墾』という小説がはからずしも暴露してしまったことが指摘される。

第四章では、第二次移民団の経験を題材にした湯浅克衛『先駆移民』（一九三八）が分析されている。実際に発生した「土竜山事件」（一九三四）をモデルにしながら、「満州」の現地住民と日本人移民者の間に発生する、様々な対立と衝突の過程が分析されていく。

国策文学として位置づけられながらも、この『先駆移民』という小説が、「満州移民」政

策と武力衝突につながる暴力の不可分な関係を提示していると論じられている。

第五章では打木村治『光をつくる人々』（一九三九）が分析されている。この小説では第一次移民団の入植過程が描かれており、「匪賊」を討伐した後、移民団の男性たちが「内地」から「花嫁」を迎えるという結末が設定されている。しかし、この小説には、日本人男性移民と結婚する現地の女性が登場する。そのことによって、安定した結末に亀裂が入り、「混血融合」の問題が、小説全体の在り方を転倒させることになる過程が論じられている。

第六章では徳永直の『先遣隊』（一九三九）と、和田伝の『大日向村』（一九三九）が論じられている。この二つの小説は、「満州」移民を送り出していった「内地」の現実に依拠した内容になっていることがまず明きからにされていく。

そのうえでこの二作が「満州」移民が同時代の大日本帝国の農村と農民にとって有益であることを強調しようとしながら、結果として「満州」移民政策の失敗と破綻をあらわにしてしまっていることが分析されている。

安志那氏は本論文において、「満州」移民を主題とした国策小説を、初めて系統的に取り上げ、これまでの歴史学や社会学における「満州」移民研究の成果を十分に活用し、精緻な表現分析を行い、それぞれの小説の独自の文学的価値を明らかにしている。

同時に「満州」移民をめぐる同時代のイデオロギー的言説と比較対照することを通じて、「満州」の移民を主題とした小説群が、必ずしも大日本帝国の国策に即した内容になっておらず、移民政策との間において様々な亀裂と矛盾を内在させていることも提示している。

安志那氏は本論文において、「満州」移民をめぐる一連の小説が、大日本帝国の植民地政策の単なる再生産とはなっておらず、「内地」と「満州」の二つの空間で生きた、多様な階層の人々の声と感情を取り込んだことによって、国策移民政策が内在させていた様々な矛盾を、結果として文学的に表象するものとなったことを明確にした。

審査の過程においては、移民政策と「満州」をめぐるイデオロギー分析との関係が十分に結合していない点、小説内部の設定と歴史的事実との類似と相違が明確になり切っていないこと、小説の内部における作中人物の位置づけと実際の歴史的事実の相関が明示的になっていないとの批判が提出された。

しかし安志那氏の本論文による研究界において初めてと言っても過言ではない「満州」移民小説の系統的な分析によって、帝国の文学が植民地を捉え、表象することによって取り込もうとした際に、そこに抵抗する無数の声が小説テキストの内在的な論理によって生まれてくることを明らかにしたことは、高く評価された。

本論文は、いままで殆ど省みられることのなかった「国策文学」を、大日本帝国のイデオロギーと、小説の文学的言説の葛藤の場としてとらえたすぐれた学問的成果である。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。